

博士論文（要旨）

論文題目

毘沙門天像の成立と展開 ―唐・宋から平安へ―

氏名

佐藤 有希子

毘沙門天像の成立と展開 — 唐・宋から平安へ —

序章	4
----	---

研究の目的と方法	4
----------	---

研究史	7
-----	---

問題の所在 — なぜ毘沙門天をとりあげるのか —	37
--------------------------	----

第一部 わが国における毘沙門天像の受容 — 奈良・平安時代 —	42
---------------------------------	----

第一章 清涼寺毘沙門天立像という異形 — 東寺像の受容と変容 —	42
----------------------------------	----

第一節 清涼寺毘沙門天立像の概要	42
------------------	----

第二節 様式的研究 — 模刻の実態 —	48
---------------------	----

第三節 唐宋・奈良・平安の文様展開 — 唐草・蓮華・雲文 —	57
--------------------------------	----

第四節 制作背景 — 制作時期・人的環境・思想背景 —	71
-----------------------------	----

第二章 東寺像以前 — 奈良・平安初期の毘沙門天像 —	92
-----------------------------	----

第一節 奈良時代末の毘沙門天信仰 — 道鏡・称徳天皇と隅寺像の舍利出現 —	92
---------------------------------------	----

第二節 東寺像の請来 — 空海と入唐八家、その毘沙門天信仰 —	98
---------------------------------	----

第三節 東寺毘沙門天像の史的位置	108
------------------	-----

第四節 東寺講堂のなかの毘沙門天	110
------------------	-----

第三章 東寺像以後 — 平安前期から中期へ —	113
第一節 九世紀後半～十世紀の造像 — 入唐八家帰朝後の展開 —	113
第二節 善水寺毘沙門天像 — 天台系における模刻 —	118
第三節 比叡山根本中堂の毘沙門天像 — もう一つの毘沙門 —	130
第二部 毘沙門天図像の源泉と伝播	139
第一章 西域の守護神 — 「兜跋」毘沙門天像の誕生 —	139
第一節 ガンダーラにおける毘沙門天図像の誕生	139
第二節 ホータン・ダマゴウ遺跡出土画像 — 于闐国の毘沙門天 —	141
第二章 唐時代の敦煌 — 毘沙門天信仰の流布 —	153
第一節 道宣の舍利信仰と毘沙門天	153
第二節 敦煌地域の毘沙門天像 — その方角と位置 —	156
第三節 盛唐～中唐時代の敦煌地域の毘沙門天像 — 甲制と対偶神 —	165
第三章 安史の乱後 — 毘沙門天信仰の拡大 —	181
第一節 陝西省・法門寺毘沙門天像 — 舍利信仰・王権とのつながり —	181
第二節 皇帝たちの毘沙門天信仰 — 晩唐・五代・宋の史料から —	202
第三節 新羅・高麗の毘沙門天像 — 朝鮮半島への伝播 —	208
第四節 南京市・長干寺舍利塔像 — 北宋における舍利と毘沙門天信仰 —	217
附論 十二世紀の毘沙門天像	231

第一節	京都・浄瑠璃寺像 — 浄土思想との結びつき —	231
第二節	上杉神社蔵毘沙門天画像 — 新発見の伝来史料紹介 —	262
第三節	雲南省昆明市・地藏寺経幢毘沙門天像 — 仏法の守護神として —	271
結論	— 毘沙門天像と東アジア世界の時空間 —	286

本文

五年以内に出版予定。

なお、附論第一節「京都・浄瑠璃寺像」については、すでに発表してある論文集（林温編『仏教美術論集 図像学Ⅱ』三〇二―三二五頁、竹林舎、二〇一四年）の出版元からインターネット公表を控えたいとの申し出があったため、公表は不可である。

図版については著作権の確認が不可能であった。

参考文献一覧

*章あるいは節ごとに発行年順に並べた。

序章

(和文)

- 一、若井富蔵「兜跋毘沙門天の形相に就いて」『史蹟と古美術』二巻一号、一九二九年一月
- 二、源豊宗「兜跋毘沙門天像の起源」『仏教美術』十五号、一九三〇年一月
- 三、松本榮一「兜跋毘沙門天図」『国華』四七一号、一九三〇(『敦煌画の研究』東方文化学院東京研究所、一九三七年に再掲)。
- 四、明珍恒男「木造毘沙門天立像 京都市新京極 誓願寺蔵」『東洋美術』(飛鳥園) 十七号、一九三三
- 五、丸尾障三郎「橋本氏蔵毘沙門天像に就いて」『美術研究』十四号、一九三三
- 六、松本文三郎「兜跋毘沙門攷」『東方学報』京都、第十冊第一分、一九三九
- 七、宮崎市定「毘沙門天信仰の東漸に就て」京都帝国大学文学部史学科編『紀元二千六百年記念史学論文集』一九四一(『宮崎市定全集』十九巻、岩波書店、一九九二所収)
- 八、久野健「東北古代彫刻史論」『美術研究』二二〇号(上)、一九六〇年五月、同二二一号(下)、一九六〇年七月
- 九、猪川和子「地天に支えられた毘沙門天彫像 兜跋毘沙門天像についての一考察」『美術研究』二二九号、一九六三年七月
- 一〇、猪川和子「邪鬼と地天女」『日本美術工芸』三二二号、一九六四

- 一一、 たなかしげひさ「鳥冠を頂く地天毘沙門の年代と系統」『仏教芸術』六三号、一九六六
- 一二、 井上正「毘沙門天像（誓願寺）」『国華』九〇七号、一九六七
- 一三、 たなかしげひさ「北成り島・比叡山寺 両毘沙門堂のトバツ天群像の関係 付 大伴の国道と伴の善男父子」『日本歴史』二三四号、一九六七年十一月
- 一四、 たなかしげひさ『地天鳥冠毘沙門』像の新研究（一）～（三）『史迹と美術』三七集の五～七（三七五～七号）、一九六七
- 一五、 佐藤昭夫「成島毘沙門堂の諸像」『仏教芸術』八五年、一九七二年五月
- 一六、 清水善三「兜跋毘沙門天 摸刻にみる美術と宗教六」『日本美術工芸』四四五号、一九七五年十月
- 一七、 田鍋隆男「九州の着甲像 新発見の毘沙門天像を中心に」『日本美術工芸』四四九号、一九七六年二月
- 一八、 宮本忠雄「不動・毘沙門を脇侍とする尊像構成」『天台美術の形成と系譜に関する総合的研究』研究報告書―京滋における天台寺院の調査―（研究代表者 清水善三）、一九七八
- 一九、 むしやのこうじみのる「東日本の兜跋毘沙門天」「兜跋毘沙門天採訪記若干」『地方仏』法政大学出版局、一九八〇年七月
- 二〇、 松島健「道成寺の仏像 本尊千手観音及び日光・月光菩薩像を中心にして」『仏教芸術』一四二号、一九八二年五月
- 二一、 八尋和泉「筑後大本山善導寺の仏像」『仏教芸術』一四四号、一九八二
- 二二、 鈴木喜博「毘沙門信仰の一形態について―不動・毘沙門研究序説」『仏教芸術』一四九号、一九八三
- 二三、 佐々木剛三「兜跋毘沙門天と枕本尊について」『古美術』六七号、一九八三年七月
- 二四、 西村千穂「毘沙門天と福」宮本袈裟雄編『民衆宗教史叢書 第二十巻 福神信仰』雄山閣出版、一九八七年二月
- 二五、 北進一「兜跋毘沙門天請来ス 兜跋毘沙門天研究」『象徴図像研究』四号、一九九〇
- 二六、 橋本章彦「毘沙門天と念仏 仏法守護神から福神へ」『仏教史学研究』三三巻一号、一九九〇

- 二七、 高橋昌明「羅城門の毘跋毘沙門天」『立命館文学』五二一号、一九九一
- 二八、 臺信裕爾「敦煌の四天王圖像」『東京国立博物館紀要』二七号、一九九二
- 二九、 宮治昭「毘跋毘沙門天の成立をめぐる対立と交流による圖像の成立」国際交流美術史研究会第十回シンポジウム『東洋美術史における西と東 対立と交流』、一九九二年三月
- 三〇、 橋本章彦「鎌倉時代における融通念仏の展開と鞍馬寺の焼亡」『文芸論叢』三九号、大谷大学文芸学会、一九九二
- 三一、 橋本章彦『神峯山寺秘密縁起』の奥書を検証する『宗教民俗研究』二号、日本宗教民俗学研究会、一九九二
- 三二、 松浦正昭『毘沙門天像 日本の美術三一五号』至文堂、一九九二
- 三三、 橋本章彦「中世神峯山信仰の思想 『神峯山寺秘密縁起』の分析から」『説話・伝承学』一号、説話・伝承学会、一九九三
- 三四、 橋本章彦「化身する毘沙門天」『文芸論叢』四一号、大谷大学文芸学会、一九九三
- 三五、 神田雅章「城門楼上の毘沙門天について―東寺毘跋毘沙門天立像の羅城門安置をめぐる―」『美術史学』一六号、一九九四
- 三六、 橋本章彦「研究と資料 曼殊院蔵 撰津本山寺毘沙門天塔婆勸進帳」『文芸論叢』四三号、大谷大学文芸学会、一九九四
- 三七、 橋本章彦「撰津神峯山寺における法会と説話 修正会における般若咒縛之作法とその起源伝承をめぐる」『山岳修験』十五号、日本山岳修験学会、一九九五
- 三八、 金香淑「中国四川省における毘沙門天像の概観―資料の紹介―」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』十二号、一九九六
- 三九、 北進一「福岡・観世音寺の毘跋毘沙門天像および大黒天像試論」『和光大学人文学部紀要』三十一号、一九九六
- 四〇、 井筒信隆「高野山円通寺蔵 不動明王二童子毘沙門天圖像について」『MUSEUM』五四一号、一九九六
- 四一、 北進一「岩手・成島毘沙門堂の毘跋毘沙門天像および伝吉祥天像試論」『和光大学人文学部紀要』三十二号、一九九六

九七

四二、 神部佳文「尼崎市白衣観音寺と御津町見性寺の毘沙門天立像——腰に手を当てる毘沙門天について——」『塵界』兵庫県立歴史博物館紀要、九号、一九九七

四三、 山下立「滋賀県樹下神社の石像毘沙門天坐像」『史迹と美術』六七五号、一九九七

四四、 田辺勝美「多聞天と言う名称に関する一考察」『大和文華』九八号、一九九七

四五、 中川聡「毘沙門天と山の神」『今昔物語集』『古本説話集』『宇治拾遺物語』『二松学舎大学人文論叢』五九号、一九九七

四六、 神田雅章「平安時代兜跋毘沙門天彫像の研究」『鹿島美術研究年報別冊』一四号、一九九七

四七、 橋本章彦「寺院縁起の中得天台仏教」『神峯山寺秘密縁起』の場合」『伝承文学研究』四六号、伝承文学研究会、一九九七

四八、 久野健「兜跋毘沙門天の道」『史迹と美術』六八之五（六八五号）、一九九八

四九、 岡田健「東寺毘沙門天像——羅城門安置説と造立年代に関する考察——（上）」『美術研究』三七〇号、一九九八。同（下）『美術研究』三七一号、一九九八

五〇、 松浦正昭「毘沙門天法の請来と羅城門安置像」『美術研究』三七〇号、一九九八

五一、 田辺勝美『毘沙門天像の誕生 シルクロードの東西文化交流』吉川弘文館、一九九八

五二、 丸山士郎「東京国立博物館保管天王立像と兜跋毘沙門天」『MUSEUM』五六一号、一九九九年八月

五三、 北進一「毘沙門天像の変遷」『世界美術大全集 東洋編 十五卷 中央アジア』小学館、一九九八

五四、 橋本章彦『今昔物語集』の毘沙門天信仰 本朝仏法部を中心にして」『河南論集』五号、一九九八

五五、 西川明子「東北地方における毘沙門天像と田村麻呂伝説の関連について」『藝叢』十六号、一九九八

五六、 北村太道「チベット所伝毘沙門天の研究（一）」『種智院大学 密教資料研究所紀要』二号、一九九八。同「チベット所伝毘沙門天の研究（二）」『ゲルク派の毘沙門天の許可』同誌三号、二〇〇〇年。同「チベット所伝毘沙門天の研究

- (三) カギユ・ニンマ併修の毘沙門天の許可」同誌三号、二〇〇〇。同「チベット所伝毘沙門天の研究(四)―毘沙門天など三財宝神の護摩―」同誌四号、二〇〇一。同「チベット所伝毘沙門天の研究(五)―プトン著作の毘沙門天儀軌―」同誌四号、二〇〇一。同「チベット所伝毘沙門天の研究(六)―プトン著作の『毘沙門天王礼讃文』―」同誌五号、二〇〇二。同「チベット所伝毘沙門天の研究(七)―ポトン著作の『毘沙門天王の現觀増益』―」同誌六、七号、二〇〇五。同「チベット所伝毘沙門天の研究(八)―チェキ―・タクパ著作『黄毘沙門天息災安樂行を成就して供養する作業次第』―」同誌八号、二〇〇六
- 五七、 今井淨圓「毘沙門天に関する研究ノート」『種智院大学 密教資料研究所紀要』三号、二〇〇〇年三月
- 五八、 今井淨圓「書評 田辺勝美著『毘沙門天像の誕生 ―シルクロードの東西交流―』(吉川弘文館 一九九九年十二月刊行)」『種智院大学 密教資料研究所紀要』三号、二〇〇〇年三月
- 五九、 津田徹英「滋賀・錦織寺天安堂毘沙門天像と天台系所伝『北方毘沙門天王随軍護法真言』の周辺」『日本宗教文化史研究』九号、二〇〇一
- 六〇、 北尾隆心「毘沙門天法の研究Ⅰ 報恩院流『毘沙門天法』次第①」『種智院大学 密教資料研究所紀要』五号、二〇〇二
- 六一、 「木造兜跋毘沙門天立像(愛知県・庚申講)」『月刊文化財』四六四号、二〇〇二年五月
- 六二、 小山喜美子「毘沙門天と藤田氏 ―兵庫県美囊郡吉川町を中心に―」『園田学園女子大学論文集』三七号、二〇〇二
- 六三、 小師順子「中国における毘沙門天靈驗譚の成立―安西城靈驗譚を中心に―」『駒澤大学仏教学部論集』―三四号、二〇〇三
- 六四、 奥健夫「和歌山・金剛峰寺毘沙門天立像より発見された像内納入仏像」『月刊文化財』四七六号、二〇〇三
- 六五、 小師順子「毘沙門天靈驗譚の成立について―不空と毘沙門天の關係を中心に―」『印度学仏教学研究』五三卷一号(二〇五号)、二〇〇四

- 六六、「木造毘沙門天立像（京都府・弘源寺）」『月刊文化財』四八九号、二〇〇四
- 六七、岩佐光晴「川端家寄贈の毘沙門天立像」『MUSEUM』五九二号、二〇〇四
- 六八、近藤謙「石山寺毘跋毘沙門天像に関する一試論」『仏教大学大学院紀要』三三二号、二〇〇四年三月
- 六九、岡田健「東寺毘沙門天像の十二世紀」『院政期文化論集』四号、森話社、二〇〇四
- 七〇、高橋堯昭「毘跋毘沙門天像成立に見られる西方文化の包容と大乘思想の具現化」『身延論叢』一〇号、二〇〇五年三月
- 七一、「木造毘跋毘沙門天立像（京都府・青蓮院）」『月刊文化財』五〇一号、二〇〇五年六月
- 七二、小師順子「毘沙門天信仰の研究 日光外山の縁日『福銭貸し』を通して」『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』三十九号、二〇〇六年五月
- 七三、大島幸代「唐代中期の毘沙門天信仰と造像活動―玄宗から憲宗へ―」『美術史研究』四五冊、二〇〇七
- 七四、橋本章彦『毘沙門天 ―日本的展開の諸相―』岩田書院、二〇〇八
- 七五、陸載和「韓国における『いわゆる毘跋毘沙門天』の図像について」『韓国の浮彫形態の仏教集合尊像（四仏・五大明王・四天王・八部衆）に関する総合調査』（平成十六年度～十八年度科学研究費補助金基盤研究（B）海外学術研究成果報告書、研究代表者・朴亨國）、二〇〇八
- 七六、長坂一郎「山形・立石寺根本中堂木造毘沙門天立像について」『MUSEUM』六一八号、二〇〇九年二月
- 七七、大島幸代「四川地域の毘沙門天像 ―形式にみる四川的特徴について―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五五輯三分冊、二〇一〇年二月
- 七八、陸載和「根津美術館蔵石造浮屠の四天王像について いわゆる毘跋毘沙門天を中心に」『武蔵野美術大学研究紀要』四二号、二〇一一年三月
- 七九、武笠朗「京都・清水寺慈心院の毘沙門天立像」林温編『仏教美術論集一 様式論―スタイルとモードの分析』竹林舎、二〇一二年十月

(中国語)

- 一、柳存仁「毘沙門天王父子与中国小説之關係」初出は『新亜學報』第三卷第二期、一九五八、香港。同『和風堂文集』中卷(上海古籍出版社、一九九一)所収
- 二、寧強「巴中南龕第九三號毘沙門天王造像龕新探」『敦煌研究』一九八九年第三期
- 三、胡文和『四川道教仏教石窟芸術』四川人民出版社、一九九四
- 四、梁尉英「略論敦煌晚唐芸術の世俗化」『莫高窟第九窟、第一二窟(晚唐)』江蘇美術出版社、一九九四
- 五、鄭阿財『龍興寺毘沙門天王靈驗記』与敦煌地区的毘沙門信仰、『周紹良先生欣開九秩慶寿文集』、中華書局、一九九七
- 六、嚴耀中「護教与護国——毘沙門天王崇拜術論」『漢伝密教』新華書店、一九九九
- 七、楊宝玉「敦煌文書『龍興寺毘沙門天王靈驗記』校考」『文獻』二〇〇〇年二期
- 八、古正美「于闐与敦煌的毘沙門天王信仰」、敦煌研究院編『二〇〇〇年敦煌學國際學術討論會文集 歷史文化卷・上』甘肅民族出版社、二〇〇三
- 九、李淞「略論中国早期天王圖像及其西方来源——天王圖像研究之二」鄭炳林他編『麦積山石窟芸術文化論文集』蘭州大学出版社、二〇〇四
- 一〇、党燕妮「晚唐五代敦煌地区的毘沙門天王信仰」、鄭炳林主編『敦煌帰義軍史專題研究三編』、甘肅文化出版社、二〇〇五。同「毘沙門天王信仰在敦煌的流传」『敦煌研究』二〇〇五年第三期
- 一一、公維章「唐宋間敦煌的城隍与毘沙門天天王」『宗教学研究』二〇〇五年二期
- 一二、汪泛舟「敦煌石窟天王信仰考論」敦煌研究院編『二〇〇四年石窟研究國際學術會議論文集』上海古籍出版社、二〇〇六
- 一三、張永安「敦煌毘沙門天天王圖像及其信仰概述」『蘭州大學學報(社会科学版)』第三五卷第六期、二〇〇七年十一月
- 一四、郭俊葉「托塔天王与哪吒——兼談敦煌毘沙門天王赴哪吒会図」『敦煌研究』二〇〇八年第三期(第一〇九期)

- 一五、 謝繼勝「榆林窟15窟天王與吐蕃天王圖像演變分析」『裝飾』一八二期、二〇〇八年八月
- 一六、 巫新華「新疆和田達瑪溝仏寺考古新發現與研究」『文物』二〇〇九年八期
- 一七、 王濤「唐代城市保護神與宗教」『社會科學戰線』二〇一一年九期
- 一八、 沙武田「文化認同與藝術選取——以榆林窟第十五、二五窟為例看吐蕃密教藝術進入敦煌石窟的嘗試」『大興善寺興唐密文化學術研討會論文集』第三編、大興善寺興唐密文化學術研討會組織委員會、二〇一一
- 一九、 沙武田『吐蕃統治時期敦煌石窟研究』四六—五二頁、中國社會科學出版社、二〇一三年三月。

(歐文)

- 一、 M.Aurel Stein, *Ancient Khotan*, Oxford, The Clarendon Press, 1907.
- 二、 Münsterberg O. "Influences occidentales dans l'art de l'Extrême-Orient", *Revue des études ethnographiques et sociologiques*, 1909.
- 三、 Tucci, G. *Tibetan Painted Scrolls*, Vol. II, Roma, 1949.
- 四、 Stein, R. A. *Recherches sur l'épopée et le barde au Tibet*, Paris, 1959.
- 五、 Granoff, Ph. "Tobatsu Bishamon: Three Japanese Statues in the United States and an Outline of the Rise of This Cult in East Asia", *East and West*, vol. 20, 1970.
- 六、 Joanna Williams "The Iconography of khotanese Painting", *East and West* N.S. vol. 23, Rome, 1973.
- 七、 Bezard, R.J. "La Représentation de Vaisravana dans l'Asie centrale; son rapport possible avec le monde Kusana." *Actes du XXIXe Congrès international des Orientalistes*, Paris, 1973.
- 八、 Deborah Klimburg-Salter "Vaisravana in North-West India. Recent Researches in Indian Archaeology and Art History", Delhi, 1981.
- 九、 Monique Maillard, Robert Jera-Bezard, "Les stupas de Kuberavahana à Chilas et Thalpan. Antiquities of

第一部

第一章

- 一、若井富藏「兜跋毘沙門天の形相に就いて」『史蹟と古美術』二卷一号、一九二九
- 二、松本榮一「兜跋毘沙門天図」四三九頁『敦煌画の研究』東方文化学院東京研究所、一九三七
- 三、塚本善隆「嵯峨清凉寺史 平安朝篇——棲霞、清凉二寺盛衰考——」『仏教文化研究』五号、一九五五（『塚本善隆著作集』第七卷、大東出版社、一九七五、所収）
- 四、小林剛「六波羅蜜寺の地藏菩薩立像について」『大和文華』二七号、一九五八
- 五、水野敬三郎「快慶作品の検討」『美術史』四七号、一九六三（『日本彫刻史研究』、中央公論美術出版、一九九六所収）
- 六、水野敬三郎「禅定寺の彫刻とその周辺」『MUSEUM』一七一号、一九六五（同『日本彫刻史研究』所収）
- 七、竹島卓一『营造法式の研究』中央公論美術出版、一九七二
- 八、宇野茂樹「園城寺の新羅明神像」『近江路の彫像』雄山閣出版、一九七四
- 九、西村兵部他『日本の文様 唐草』光琳社出版、一九七四
- 一〇、西川杏太郎「阿弥陀如来坐像」（元興寺）『大和古寺大観』三卷、岩波書店、一九七七
- 一一、井上正「伝宝生如来立像」『奈良六大寺大観』十三卷、唐招提寺二、岩波書店、一九七七
- 一二、中野徹「宋代陶磁の文様」『世界陶磁全集十二 宋』小学館、一九七七
- 一三、奈良国立博物館編『奈良国立博物館名品図録』同朋舎出版、一九七九
- 一四、頼富本宏「賛寧を通して見た中国仏教」『中国密教の研究』、大東出版社、一九七九
- 一五、荒木計子「入宋僧裔然と清凉寺建立の諸問題」『学苑』（上）四九一、（下）四九二号、一九八〇

- 一六、 水野敬三郎『大仏師定朝』『日本の美術』一六四、至文堂、一九八〇
- 一七、 岩佐光晴「六波羅蜜寺地藏菩薩立像について」『美術史学』六号、一九八四
- 一八、 小原仁「摂関・院政期における本朝意識の構造」佐伯有清編『日本古代中世史論考』吉川弘文館、一九八七
- 一九、 『平等院大観 第二卷』岩波書店、一九八七
- 二〇、 加須屋誠「子島曼荼羅試論」『京都大学文学部 美学美術史学研究室研究紀要』九号、一九八八
- 二一、 伊東史朗「祇園社旧本地観慶寺薬師如来像について―覚助・長勢時代の研究―」『国華』一一三二号、一九九〇
- 二二、 水野敬三郎「日本彫刻史上における定朝による転換」『国際交流美術史研究会第九回シンポジウム 美術史における過渡期と転換期』、国際交流美術史研究会、一九九一（同前掲『日本彫刻史研究』所収）
- 二三、 松浦正昭『毘沙門天像』五十七頁、『日本の美術』三二五号、至文堂、一九九二
- 二四、 宮治昭「インドの地天の図像とその周辺」宮坂宥勝博士古稀記念論文集刊行会『インド学 密教学研究 上―宮坂宥勝博士古稀記念論文集―』、法蔵館、一九九三
- 二五、 長岡龍作「神護寺薬師如来像の位相―平安時代初期の山と薬師―」『美術研究』三五九号、一九九四
- 二六、 奥健夫「清凉寺釈迦如来像の受容について」『鹿島美術財団年報別冊』十三号、一九九六
- 二七、 齋藤彦松「宇治平等院の字輪阿弥陀咒梵字と『天竺字源』字の研究」『印度学仏教学研究』四十五卷一号（通卷八十九号）、一九九六
- 二八、 特別展図録『東アジアの仏たち』、奈良国立博物館、一九九六
- 二九、 保立道久『平安王朝』、岩波書店、一九九六
- 三〇、 岡田健「東寺毘沙門天像―羅城門安置説と造立年代に関する考察―（上）」二頁、『美術研究』三七〇号、一九九八
- 三一、 松浦正昭「毘沙門天法の請来と羅城門安置像」三八―四〇頁『美術研究』三七〇号、一九九八
- 三二、 森公章『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館、一九九八
- 三三、 岡田健「東寺毘沙門天像―羅城門安置説と造立年代に関する考察―（下）」『美術研究』三七一号、一九九八

- 三四、伊東史朗「薬師寺の大光背」『MUSEUM』五六一号、一九九九
- 三五、特別展図録『西遊記のシルクロード 三蔵法師の道』朝日新聞社、一九九九
- 三六、伊東史朗「同聚院不動明王像と園城寺新羅明神像」『平安時代彫刻史の研究』名古屋大学出版会、二〇〇〇
- 三七、三橋正『平安時代の信仰と宗教儀礼』続群書類従完成会、二〇〇〇
- 三八、大津透『道長と宫廷社会』『日本の歴史』六巻、講談社、二〇〇一
- 三九、上川通夫「奄然入宋の歴史的意義」『愛知県立大学文学部論集』五〇号、二〇〇一
- 四〇、皿井舞「模刻の意味と機能―大安寺釈迦如来像を中心に―」『京都大学文学部美学美術史研究室研究紀要』二十二号、二〇〇一
- 四一、長岡龍作「清凉寺釈迦如来像と北宋の社会」一五頁『国華』一二六九号、二〇〇一
- 四二、皿井舞「平安時代中期における光背意匠の転換―平等院鳳凰堂阿弥陀如来像光背における雲文の成立を中心に―」『美術史』一五二号、二〇〇二
- 四三、栗田美由紀「宝相華迦陵頻伽蒔絵冊子箱の文様について」『美術史』一五五号、二〇〇三
- 四四、中川真弓「清凉寺の嚮―『宝物集』釈迦梅檀像譚を起点として―」『説話文学研究』三八号、二〇〇三
- 四五、山内晋次『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館、二〇〇三
- 四六、中川真弓『『宝物集』梅檀像震旦請来譚考』『語文』八二号、二〇〇四
- 四七、保立道久『黄金国家 東アジアと平安日本』青木書店、二〇〇四
- 四八、板倉聖哲「東寺旧蔵「山水屏風」が示す「唐」の位相」『講座日本美術史』第二巻、東京大学出版会、二〇〇五
- 四九、河添房江『源氏物語時空論』東京大学出版会、二〇〇五年
- 五〇、末吉武史「獅子」大阪市立美術館他編『国宝三井寺展』NHK大阪放送局他、二〇〇八
- 五一、奥健夫「模刻の集う寺、清凉寺」『清凉寺釈迦如来像』『日本の美術』五一三号、至文堂、二〇〇九
- 五二、皿井舞「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織」(下)『美術研究』三九八号、二〇〇九年八月

- 五三、 皿井舞「解説 日宋交流と彫刻様式の転換」三七二頁、新編森克己著作集編集委員会編『新編 森克己著作集 第四卷 増補 日宋文化交流の諸問題』勉誠出版、二〇一一年一月

第二章

第一節

- 一、横田健一『道鏡』『人物叢書』新装版、吉川弘文館、一九八八
- 二、東京女子大学古代史研究会「聖武天皇宸翰『雑集』「鏡中釈霊実集」 注解（その一）」『続日本紀研究』三二五号、二〇〇〇
- 三、木本好信「牛屋大臣」藤原是公について『政治経済史学』四二四号、二〇〇一
- 四、木本好信「藤原是公の係累」『政治経済史学』四三五号、二〇〇二
- 五、東京女子大学古代史研究会「聖武天皇宸翰『雑集』「鏡中釈霊実集」 注解（その二十六）」『続日本紀研究』三五八号、二〇〇五

第二節

- 一、村尾次郎『桓武天皇』吉川弘文館、一九六三
- 二、中久野健「平安初期における延暦寺の仏像」『美術研究』二六〇号、一九六八
- 三、野玄三『鞍馬寺』中央公論美術出版、一九七二
- 四、高橋崇『人物叢書 坂上田村麻呂』吉川弘文館、一九八六
- 五、高橋昌明「羅城門の兜跋毘沙門天」『立命館文学』五二二号、一九九一
- 六、神田雅章「城門楼上の毘沙門天について―東寺兜跋毘沙門天立像の羅城門安置をめぐる―」『美術史学』一六号、一九九四

- 七、岡田健「東寺毘沙門天像―羅城門安置説と造立年代に関する考察―」（上）『美術研究』三七〇号、一九九八
- 八、津田徹英「滋賀・錦織寺天安堂毘沙門天像と天台系所伝『北方毘沙門天王随軍護法真言』の周辺」『日本宗教文化史研究』九号、二〇〇一
- 九、小師順子「中国における毘沙門天靈驗譚の成立―安西城靈驗譚を中心に―」『駒澤大学仏教学部論集』三四号、二〇〇三
- 一〇、小師順子「毘沙門天靈驗譚の成立について―不空と毘沙門天の關係を中心に―」『印度学仏教学研究』五三卷一号（二〇五号）、二〇〇四
- 一一、頼富本宏『平安のマルチ文化人 空海』日本放送出版協会、二〇〇五

第三節

- 一、岡田健「東寺毘沙門天像―羅城門安置説と造立年代に関する考察―」（上）『美術研究』三七〇号、一九九八
- 二、松浦正昭「毘沙門天法の請来と羅城門安置像」『美術研究』三七〇号、一九九八

第四節

- 一、「十二天画像概説―京博本十二天画像を中心にして―」京都国立博物館『十二天画像の名作』一九七七
- 二、神田雅章「城門楼上の毘沙門天について―東寺兜跋毘沙門天立像の羅城門安置をめぐって―」『美術史学』一六号、一九九四
- 三、瀬山里志「陀羅尼集經様四天王像の日本における受容と展開」『仏教芸術』二三九号、一九九八
- 四、今津玲子「西大寺蔵十二天画像の図像的考察」『日本宗教文化史研究』一〇（二）号（通卷二〇号）、二〇〇六

第三章

第一節

- 一、高橋崇『人物叢書 坂上田村麻呂』吉川弘文館、一九八六
- 二、大矢邦宣「北奥の豊饒華麗な仏の世界―岩手の仏像」『仏像を旅する 東北線』別冊 近代の美術』至文堂、一九九〇
- 三、佐伯有清『聖宝』吉川弘文館、一九九一
- 四、松浦正昭「毘沙門天法の請来と羅城門安置像」『美術研究』三七〇号、一九九八
- 五、奈良県教育委員会文化財保存課「銅像毘沙門天立像」『奈良県指定文化財』平成十一年度版（第四十一集）、二〇〇一
- 六、高橋文明「岩手県北上市国見山廃寺跡の調査」『日本歴史』六四五号、二〇〇二
- 七、近藤謙「石山寺兜跋毘沙門天像に関する一試論」『仏教大学大学院紀要』三三二号、二〇〇四年三月

第二節

- 一、『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代造像銘記篇 一』六七頁、中央公論美術出版、一九六六
- 二、宇野茂樹「近江国善水寺の諸尊」一頁、『滋賀県立琵琶湖文化館 研究紀要』四号、一九八六
- 三、有賀祥隆『截金と彩色』『日本の美術』三七三三号、至文堂、一九九七
- 四、津田徹英「書写山円教寺根本堂伝来 滋賀・舍那院藏 薬師如来像をめぐって」『仏教芸術』二五〇号、二〇〇〇
- 五、松岡久美子「滋賀・善水寺四天王像について」『栗東歴史民俗博物館紀要』七号、二〇〇一
- 六、近藤謙「善水寺兜跋毘沙門天像に関する一考察」九六頁『仏教大学アジア宗教文化情報研究所研究紀要』一号、二〇〇四

第三節

- 一、猪川和子「地天に支えられた毘沙門天彫像―兜跋毘沙門天像についての一考察―」『美術研究』二二九号、一九六三年

七月

- 二、久野健「平安初期における延暦寺の仏像」『美術研究』二六〇号、一九六八
- 三、佐伯有清「大伴宿禰国道伝考」『成城文芸』一四八号、一九九四
- 四、松浦正昭「毘沙門天法の請来と羅城門安置像」『美術研究』三七〇号、一九九八

第二部

第一章

第一節

- 一、宮治昭「兜跋毘沙門天の成立をめぐる――対立と交流による図像の成立――」国際交流美術史研究会第十回シンポジウム『東洋美術史における西と東――対立と交流――』、一九九二年三月
- 二、田辺勝美『毘沙門天像の誕生 シルクロードの東西文化交流』吉川弘文館、一九九九
- 三、北進一「毘沙門天像の変遷」『世界美術大全集十五巻 東洋編 中央アジア』、小学館、一九九九
- 四、田辺勝美『毘沙門天像の起源 ガンダーラにおける東西文化の交流』東京大学博士論文、二〇〇二

第二節

- 一、M.Aurel Stein, *Ancient Khotan*, Oxford, The Clarendon Press, 1907
- 二、寺本婉雅『于闐国史』丁字屋書店、一九二一
- 三、原田淑人『西域發見の絵画に見えたる服飾の研究』第二章第三節、東洋文庫、一九二五
- 四、源豊宗「兜跋毘沙門天像の起源」、『仏教美術』十五号、一九三〇
- 五、松本榮一「兜跋毘沙門天像の起源」『国華』四七一号、一九三〇

- 六、松本榮一「兜跋毘沙門天図」『敦煌画の研究』第九節、東方文化研究所、一九三九
- 七、Joanna Williams、*The Iconography of Khotanese Painting*. East and West N.S. vol. 23, Rome, 1973
- 八、Deborah Klimburg-Salter、*Vaisravana in North-West India: Recent Researches in Indian Archaeology and Art History*, Delhi, 1981
- 九、宮治昭「兜跋毘沙門天の成立をめぐる対立と交流による図像の成立」『国際交流美術史研究会第十回シンポジウム『東洋美術史における西と東—対立と交流—』一九九二年三月
- 一〇、Monique Maillard, Robert Jera-Bezard、*Les stupas de Kuberavahana à Chilas et Thalpan*. Antiquities of Northern Pakistan, vol.3, Mainz, 1994
- 一一、神田雅章「城門楼上の毘沙門天について—東寺兜跋毘沙門天立像の羅城門安置をめぐる—」『美術史学』一六号、一九九四
- 一二、岡田健「東寺毘沙門天像—羅城門安置説と造立年代に関する考察—」(上)『美術研究』三七〇号、一九九八
- 一三、湯浅邦弘『太白陰経』の兵学思想』(『大阪大学大学院文学研究科紀要』四〇号、二〇〇〇
- 一四、田辺勝美『毘沙門天像の起源 ガンダーラにおける東西文化の交流』東京大学博士学位論文、二〇〇二
- 一五、小師順子「中国における毘沙門天靈驗譚の成立—安西城靈驗譚を中心に—」『駒澤大学仏教学部論集』三四号、二〇〇三
- 一六、小師順子「毘沙門天靈驗譚の成立について—不空と毘沙門天の關係を中心に—」『印度学仏教学研究』五三卷一号(二〇五号)、二〇〇四
- 一七、巫新華、郭物、雷然、鐘建、艾力、艾則孜、買提哈斯木「新疆和田地区策勒県達瑪溝仏寺遺址発掘報告」『考古学報』二〇〇七年四期
- 一八、謝継勝「榆林窟15窟天王像与吐蕃天王像演分析」『裝飾』一八二期、二〇〇八年六月
- 一九、巫新華「新疆和田達瑪溝仏寺考古新發現与研究」『文物』二〇〇九年八期

- 二〇、沙武田「文化認同与芸術選択——以榆林窟第15、25窟為例看吐蕃密教芸術進入敦煌石窟的嘗試」『大興善寺興唐密文化學術研討會論文集』第三編、大興善寺興唐密文化學術研討會組織委員會、二〇一一
- 二一、中共策勒县委、策勒县人民政府著『策勒達瑪溝』大成圖書有限公司、二〇一二年二月

第二章

第一節

- 一、奈良国立博物館編『東アジアの仏たち』、奈良国立博物館、一九九六
- 二、浅井和春「飛鳥く奈良時代の仏像莊嚴と『瑞像』思想」科学研究費補助金基盤研究・研究成果報告書『日本上代における仏像の莊嚴』、二〇〇三

第二節

- 一、矢吹慶輝『鳴沙餘韻』岩波書店、一九三二
- 二、松本榮一「兜跋毘沙門天図」『敦煌画の研究』東方文化学院東京研究所、一九三七
- 三、松本文三郎「兜跋毘沙門攷」『東方学報』京都、第十冊第一分、一九三九
- 四、宮崎市定「毘沙門天信仰の東漸に就て」京都帝国大学文学部史学科編『紀元二千六百年記念史学論文集』、一九四一（『宮崎市定全集』一九卷、岩波書店、一九九二所収）。
- 五、賀世哲「從供養人題記看莫高窟部分洞窟的營建年代」、敦煌研究院編『敦煌莫高窟供養人題記』文物出版社、一九八六
- 六、孫修身「佛教美術興古代于闐」『新疆社会科学』一九八六年一期
- 七、寧強「巴中南龕第九三号毘沙門天王造像龕新探」『敦煌研究』一九八九年第三期
- 八、臺信祐爾「敦煌の四天王圖像」『東京国立博物館紀要』二七号、一九九二

九、張広達、榮新江『于闐史叢考』、上海書店、一九九三

一〇、榮新江「于闐国王興瓜沙曹氏」『敦煌研究』一九九四年二期

一一、梁尉英「略論敦煌晚唐芸術的世俗化」『莫高窟第九窟、第二二窟（晚唐）』江蘇美術出版社、一九九四

一二、呂建福『中国密教史』、中国社会科学出版社、一九九五

一三、馬德『敦煌莫高窟史研究』、甘肅教育出版社、一九九六

一四、敦煌研究院『敦煌石窟内容総録』文物出版社、一九九六

一五、鄭阿財『龍興寺毘沙門天王靈驗記』興敦煌地区的毘沙門信仰、『周紹良先生欣開九秩慶寿文集』、中華書局、一九

九七

一六、嚴耀中「護教興護国——毘沙門天王崇拜術論」『漢伝密教』新華書店、一九九九

一七、岡田健「東寺毘沙門天像——羅城門安置説と造立年代に関する考察——」（上）『美術研究』三七〇号、一九九八。同（下）三七一号、一九九九

一八、楊宝玉「敦煌文書『龍興寺毘沙門天王靈驗記』校考」『文献』二〇〇〇年二期

一九、孫修身『敦煌仏教東伝歴史故事画卷』、敦煌研究院編『敦煌石窟全集』、上海人民出版社、二〇〇〇

二〇、古正美「于闐興敦煌的毘沙門天王信仰」、敦煌研究院編『二〇〇〇年敦煌学国際學術討論会文集 歴史文化卷・上』、

甘肅民族出版社

二一、買忠逸 祁小山『印度到中国新疆的仏教芸術』、甘肅教育出版社、二〇〇二

二二、陳明、沙武田「莫高窟第九八窟及其对曹氏帰義軍時期大窟宮建之影響」、鄭炳林主編『敦煌仏教芸術文化国際學術
研討会論文集』、蘭州大学出版社、二〇〇二

二三、小師順子「中国における毘沙門天靈驗譚の成立——安西城靈驗譚を中心に——」『駒澤大学仏教学部論集』三四号、二
〇〇三

二四、小師順子「毘沙門天靈驗譚の成立について——不空と毘沙門天の關係を中心に——」『印度学仏教学研究』五三卷一号

(一〇五号)、二〇〇四

二五、党燕妮「晚唐五代敦煌地区的毘沙門天王信仰」、鄭炳林主編『敦煌帰義軍史專題研究三編』、甘肅文化出版社、二〇〇五

二六、沙武田『敦煌画稿研究』之「毘沙門天王画稿」、蘭州大学敦煌学研究所二〇〇五年博士学位論文

二七、郭俊葉「托塔天王与哪吒——兼談敦煌毘沙門天王赴哪吒会図」『敦煌研究』二〇〇八年第三期(第一〇九期)

第三節

一、源豐宗「兜跋毘沙門天像の起源」四三—四四頁、『仏教美術』一五号、一九三〇

二、宮崎市定「毘沙門天信仰の東漸に就て」京都帝国大学文学部史学科編『紀元二千六百年記念史学論文集』、一九四一(『宮崎市定全集』一九卷、岩波書店、一九九二所収)

三、段文傑「唐代後期の莫高窟芸術」敦煌研究院編『中国石窟・敦煌莫高窟』第四卷、平凡社、一九八二

四、「図版解説」(莫高窟第一五四窟)、敦煌研究院編『中国石窟・敦煌莫高窟』第四卷、平凡社、一九八二

五、「図版解説」(莫高窟第一五八窟)、敦煌研究院編『中国石窟・敦煌莫高窟』第四卷、平凡社、一九八二

六、浅井和春「平安前期地藏菩薩像の研究」二一頁、『東京国立博物館紀要』第二三号、一九八七年三月

七、馬德「吳和尚・吳和尚窟・吳家窟——《腊八燃灯分配窟龕名数》從識之一」『敦煌研究』一九八七年第三期

八、段文傑「榆林窟の壁画芸術」、敦煌研究院編『中国石窟・安西榆林窟』、平凡社、一九九〇

九、「図版解説」(榆林窟第二五窟)、敦煌研究院編『中国石窟・安西榆林窟』、平凡社、一九九〇

一〇、樊錦詩・劉玉權「吐蕃占領時期莫高窟洞窟的分期研究」『敦煌研究』一九九四年第四期(敦煌研究院編『敦煌研究文集 敦煌石窟考古編』甘肅民族出版社、二〇〇〇年九月に収録)

一一、馬德「敦煌世族造窟概覽」『敦煌莫高窟史研究』、甘肅教育出版社、一九九六

一二、季羨林主編『敦煌学大辞典』上海辞書出版社、一九九八

- 一三、岡田健「東寺毘沙門天像―羅城門安置説と造立年代に関する考察―（下）」『美術研究』三七一号、一九九九
- 一四、樊錦詩・劉玉権「敦煌莫高窟唐前期洞窟分期」、敦煌研究院編『敦煌研究文集 敦煌石窟考古編』甘肅民族出版社、二〇〇〇年九月
- 一五、孫修身『敦煌仏教東伝歴史故事画卷』、敦煌研究院編『敦煌石窟全集』、上海人民出版社、二〇〇〇
- 一六、孫修身『敦煌仏教東伝歴史故事画卷』七四頁、敦煌研究院編『敦煌石窟全集』、上海人民出版社、二〇〇〇
- 一七、彭金章『密教画卷』、敦煌研究院編『敦煌石窟全集』、上海人民出版社、二〇〇三
- 一八、小師順子「中国における毘沙門天靈驗譚の成立―安西城靈驗譚を中心に―」『駒澤大学仏教学部論集』三四号、二〇〇三
- 一九、小師順子「毘沙門天靈驗譚の成立について―不空と毘沙門天の關係を中心に―」『印度学仏教学研究』五三卷一号（二〇五号）、二〇〇四
- 二〇、譚蟬雪「蕃漢官服」敦煌研究院編『敦煌石窟全集 服飾画卷』、上海人民出版社、二〇〇五
- 二一、田辺勝美『毘沙門天像の起源 ガンダーラにおける東西文化の交流』山喜房仏書林、二〇〇六
- 二二、肥田路美「地藏・観音並列像資料攷―四川地域の造像例と靈驗説話―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第五一輯・第三分冊、二〇〇六年二月
- 二三、大島幸代「唐代中期の毘沙門天信仰と造像活動―玄宗から憲宗へ―」『美術史研究』四五冊、二〇〇七
- 二四、謝継勝「榆林窟15窟天王像与吐蕃天王像演分析」『裝飾』一八二期、二〇〇八年六月
- 二五、橋本章彦『毘沙門天―日本の展開の諸相―』四五・四七頁、岩田書院、二〇〇八
- 二六、田中公明『チベットの仏たち』一九七頁、方丈堂出版、二〇〇九年十月
- 二七、沙武田「榆林窟第二五窟の造営年代に関する諸問題」三五頁『奈良美術研究』第九号、二〇一〇年二月

第三章

第一節

- 一、松本文三郎「兜跋毘沙門攷」『東方学報』京都、第十冊第一分、一九三九
- 二、宮崎市定「毘沙門天信仰の東漸に就て」京都帝国大学文学部史学科編『紀元二千六百年記念史学論文集』、一九四一（『宮崎市定全集』一九卷、岩波書店、一九九二年所収） 氣賀澤保規「扶風法門寺の歴史と現状——仏舎利の来た寺」『仏教芸術』一七九号、一九八八年七月
- 三、氣賀澤保規「中国法門寺成立をめぐる一考察」『富山大学教養部紀要 人文・社会科学篇』二三卷一号、一九九〇
- 四、宮治昭「インドの地天の図像とその周辺」宮坂宥勝博士古稀記念論文集刊行会『インド学 密教学研究 上—宮坂宥勝博士古稀記念論文集—』法蔵館、一九九三
- 五、氣賀澤保規「唐法門寺咸通十四年（八七三）舍利供養をめぐる一考察——あわせて法門寺「真身誌文」碑の検討」『駿台史学』九七号、一九九六年三月
- 六、氣賀澤保規「隋仁寿元年（六〇一）の学校削減と舍利供養」『駿台史学』一一一号、二〇〇一
- 七、韓金科『法門寺文化與法門学』五洲伝播出版社、西安市、二〇〇一
- 八、小師順子「中国における毘沙門天靈驗譚の成立—安西城靈驗譚を中心に—」『駒澤大学仏教学部論集』三四号、二〇〇三
- 九、小師順子「毘沙門天靈驗譚の成立について—不空と毘沙門天の關係を中心に—」『印度学仏教学研究』五三卷一号（二〇五号）、二〇〇四
- 一〇、楊泓『中国古兵与美術考古論集』文物出版社、二〇〇七
- 一一、陝西省考古研究院他『法門寺考古發掘報告』上、文物出版社、二〇〇七
- 一二、大島幸代「唐代中期の毘沙門天信仰と造像活動——玄宗から憲宗へ——」『美術史研究』四五冊、二〇〇七
- 一三、姜捷・李發良「唐法門寺塔及地宮沿革探討」法門寺博物館編『法門寺博物館論叢』一、三秦出版社、二〇〇八

- 一四、楊 洁 「唐代鎮墓天王俑的仏教世俗化因素考略——兼談兩京地区的差異」『四川文物』二〇〇九年〇五期
- 一五、早稻田大学大学院東洋美術史「美術史料として読む『集神通三宝感通録』——釈読と研究——」（三）『奈良美術研究』九号、二〇一〇

第二節

- 一、金戴元・尹武炳『感恩寺址発掘調査報告書』国立博物館特別調査報告第二冊、乙酉文化社、一九六一
- 二、강소영(Gang Soon Hyoung)「感恩寺塔内舍利器奏樂・舞童像論」『美術史学研究』一七八号、韓國美術史学会、一九八八
- 三、水野敬三郎「感恩寺西塔舍利具の四天王像」『仏教芸術』一八八号、一九九〇
- 四、奈良国立博物館編『東アジアの仏たち』奈良国立博物館、一九九六
- 五、申大鉉「統一新羅舍利莊嚴의 主要樣式에 대한 考察」『新羅文化祭學術發表論文集』二四号、新羅文化研究所、二〇〇三
- 六、崔福姫「慈藏と仏舍利」五大寂滅宝宮の成立を中心に「『仏教大学大学院紀要』三二号、二〇〇四年三月
- 七、朴亨國「韓国における五台山信仰について——韓国五台山信仰の開祖とされる慈藏に関する考察」真鍋俊照編『仏教美術と歴史文化』法蔵館、二〇〇五
- 八、김상태(Sang Tae Kim)「感恩寺의 舍利莊嚴에 의한 塔構成原理에 관한 研究」『建築歴史研究』一六号、韓國建築歴史学会、二〇〇七
- 九、韓政鎬「〈佛國寺无垢淨光塔重修記〉와 小倉コレクション伝慶州南山出土舍利莊嚴具」『美術史論壇』二七号、韓國美術研究所、二〇〇八
- 一〇、陸戴和「感恩寺址東・西三層石塔出土舍利容器における四天王像に関する一試論」『武蔵野美術大学大学院博士後期課程研究紀要』二号、二〇〇八
- 一一、『韓国の浮彫形態の仏教集合尊像（四仏・五大明王・四天王・八部衆）に関する総合調査』（平成一六年度～一八年度科学研究費補助金基盤研究（B）海外學術研究成果報告書、研究代表者：朴亨國）、二〇〇八

- 一二、 김지현(JiHyun Kim)「統一新羅仏塔의 四天王像과 그意味」『文物研究』東アジア文物研究學術財団』一七号、二〇一〇
- 一三、 韓政鎬「感恩寺址東三層石塔宝帳形舍利器復元再考」『新羅文化』三五号、二〇一〇
- 一四、 林玲愛「新羅仏塔塔身浮彫像의 推移」『先史와 古代』三五号、韓國古代学会、二〇一一
- 一五、 林玲愛「石窟庵四天王像」의 圖像과 仏敎經典』『講座美術史』三七号、韓國佛敎美術史学会、二〇一一
- 一六、 林玲愛「四天王寺址塑造像의 尊名」『美術史論壇』三五号、韓國美術研究所、二〇一一
- 一七、 陸載和「根津美術館藏石造浮屠の四天王像についていわれる兜跋毘沙門天を中心に」『武蔵野美術大学研究紀要』四二号、二〇一一

第三節

- 一、 江蘇省文物工作隊鎮江分隊、鎮江博物館「江蘇鎮江甘露寺鉄塔塔基発掘記」『考古』一九六一年六期
- 二、 上川通夫「末法思想と中世の『日本国』」『再生する終末思想』青木書店、二〇〇〇
- 三、 上川通夫「奄然入宋の歴史的意義」『愛知県立大学文学部論集』五〇号、二〇〇一
- 四、 浅井和春「飛鳥く奈良時代の仏像莊嚴と『瑞像』思想」『科学研究費補助金基盤研究・研究成果報告書』日本上代における仏像の莊嚴』二〇〇三
- 五、 黎毓馨「阿育王塔実物的發現与初步整理」『東方博物』二〇〇九年二期
- 六、 早稻田大学大学院東洋美術史「美術史料として読む『集神州三宝感通録』——釈読と研究——」(一)(二)『奈良美術研究』七号、二〇〇八年六月。八号、二〇〇九年三月
- 七、 夏維中・楊新華・胡正寧「南京天禧寺的沿革」『江蘇社会科学』二〇一〇年三期
- 八、 南京市博物館編『聖塔仏光』南京市博物館、二〇一〇
- 九、 服部敦子「銭弘俶八万四千塔をめぐる現状と課題」『アジア遊学』一三四 東アジアをめぐる金属工芸』勉誠出版、二〇一〇

- 一〇、 崔應天（久保智康訳）「中国阿育王塔舍利器の受容 ——東国大博物館所蔵の石造阿育王塔を中心に」『アジア遊学』三四 東アジアをめぐる金属工芸』勉強出版、二〇一〇
- 一一、 稲本泰生「鄧県阿育王塔の本生図と菩薩の捨身行 ——鑑真による模造塔将来によせて——」『戒律文化』第八号、二〇一一
- 一二、 塚本麿充「皇帝の文物と北宋初期の開封（上） ——啓聖禪院、大相国寺、宮廷をめぐる文物とその意味について——」『美術研究』四〇四号、二〇一一年八月
- 一三、 冀巨平・祁海寧「《金陵長干寺真身塔藏舍利石函記》考釈及相關問題」『東南文化』二〇一二年一期
- 一四、 稲本泰生「南京長干寺址出土阿育王塔とその周辺——唐宋変革期における聖遺物崇拜の事例」（研究発表）「美術史における転換期の諸相」（科学研究費補助金・基盤研究B・研究代表者根立研介）・「芸術家と工房の内と外」（科学研究費補助金・基盤研究B・研究代表者中村俊春）二〇一一年度第二回合同研究会、二〇一二年三月、於京都大学文学部
- 一五、 東京国立博物館他編『日中国交正常化四〇周年 特別展 中国 王朝の至宝』NHK他、二〇一二年十月

附論

第一節

- 一、東京美術学校編『南都七大寺大鏡 第六十七集 第十四冊』南都七大寺大鏡発行所、一九二八
- 二、金森遵「浄瑠璃寺阿弥陀如来の造立年代」『史跡と美術』一五二号、一九四三（『日本彫刻史の研究』河原書店、一九四九所収）
- 三、小林剛・森蘊編『浄瑠璃寺』鹿鳴荘、一九五七
- 四、井上正「浄瑠璃寺九体阿弥陀如来像の造立年代について」『国華』八六一号、一九六三

- 五、水野敬三郎「四天王立像」『大和古寺大観 第七卷 海住山寺 岩船寺 浄瑠璃寺』、岩波書店、一九七八
- 六、田中義恭「阿弥陀如来坐像」『大和古寺大観 第七卷』所収、一九七八
- 七、今井卓爾『讃岐典侍日記 訳注と評論』、早稲田大学出版部、一九八六
- 八、美川圭「公卿議定制から見る院政の成立」『史林』六九—四号、一九八六
- 九、西口順子『天皇の往生』おぼえがき—堀河天皇の死をめぐる—『史窓』四五号、一九八八
- 一〇、伊東史朗「浄瑠璃寺の四天王像—天部形像における十一世紀と十二世紀—」京都国立博物館編『浄瑠璃寺の四天王像』、京都国立博物館、一九九〇
- 一一、泉武夫「絵画史からみた浄瑠璃寺四天王の彩色・文様について」京都国立博物館編『院政期の仏像—定朝から運慶へ—』、岩波書店、一九九二
- 一二、松浦正昭『毘沙門天像』、『日本の美術』三一五号、至文堂、一九九二
- 一三、海老名尚「中世前期における国家的仏事の一考察—御願寺仏事を中心として—」『寺院史研究』三号、一九九三
- 一四、遠藤其郎「院政期儀礼体系の素描—仏事を中心に—」羽下徳彦編『中世の政治と宗教』、吉川弘文館、一九九四
- 一五、保立道久『平安王朝』、岩波書店、一九九六
- 一六、大宮康男「浄瑠璃寺九体阿弥陀像造立考」『仏教芸術』一二四号、一九九六
- 一七、牧野和夫『讃仏乗抄』をめぐる新出資料—七寺蔵『大乘毘沙門功德経』と東寺観智院蔵『貞慶抄物』他—『金沢文庫研究』二九六号、一九九六
- 一八、牧野和夫「高山寺蔵仁平三年写『仏説毘沙門天王功德経』一帖 翻印・解説・諸伝本校異」『実践女子大学文学部紀要』三八号、一九九六
- 一九、敦煌研究院編『敦煌石窟内容総録』、文物出版社、一九九六
- 二〇、多々良美春『浄土庭園』の空間構成に関する考察—円成寺・浄瑠璃寺を事例として—『千葉大学園芸学部学術報告』五十二号、一九九八

- 二一、 関根俊一「浄瑠璃寺九体阿弥陀如来像について」『近畿文化』五八三号、一九九八
- 二二、 礪波恵昭「南部の浄土信仰と造像活動の一形態―迎接坊経源と浄瑠璃寺九体阿弥陀像をめぐって―」『奈良学研究』二号、一九九九
- 二三、 浅井和春「岡山・大通寺の不空罽索観音菩薩坐像」『仏教芸術』二四六号、一九九九
- 二四、 牧田諦亮監修『七寺古逸經典研究叢書 第四卷 中国日本撰述經典（其之四）・漢訳經典』、大東出版社、一九九九
- 九
- 二五、 上川通夫「一切経と中世の仏教」『年報中世史研究』二十四号、一九九九
- 二六、 齊藤隆信『大乘毘沙門功德経』解題、上掲『七寺古逸經典研究叢書 第四卷』大東出版社、一九九九
- 二七、 牧野和夫『大乘毘沙門功德経』卷三「愛生（相行）品」の一異本をめぐって『実践国文学』五七号、二〇〇〇
- 二八、 上川通夫「中世仏教と『日本国』」『日本史研究』四六三号、二〇〇一
- 二九、 元木泰雄編『日本の時代史七 院政の展開と内乱』、吉川弘文館、二〇〇二
- 三〇、 中村五郎「経塚と一〇〜一二世紀の社会・宗教の動態―高野山奥之院経塚を起点として―」『日本考古学』十四号、二〇〇二
- 三一、 肥田路美「『等身』考―唐代撰述史料にみえる皇帝像と仏像の関わりを中心に―」『風土と文化』三号、二〇〇二
- 三二、 井上英明「浄瑠璃寺九体阿弥陀像の制作年代について」『帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要』第四号、二〇〇三
- 三
- 三三、 美川圭『白河法皇 中世をひらいた帝王』、日本放送出版協会、二〇〇三
- 三四、 浅井和春「中尊寺彫像研究の現在」『仏教芸術』二七七号、二〇〇四
- 三五、 百橋明穂「信貴山縁起再考」『美術史論集』四号、二〇〇四
- 三六、 奥健夫『等身像』概念について」四三一頁『美術史家、大いに笑う―河野元昭先生のための日本美術史論集』ブリュッケ、二〇〇六

- 三七、 富島義幸「浄瑠璃寺伽藍再考」『仏教芸術』三二八号、二〇一一
- 三八、 武笠朗「京都・清水寺慈心院の毘沙門天立像」『仏教美術論集一 様式論 スタイルとモードの分析』竹林舎、二〇一二
- 三九、 深沢麻亜沙「浄瑠璃寺薬師如来像と平安後期の南山城の宗教空間」『美術史学』三三三号、二〇一二
- 四〇、 八田達男「浄瑠璃寺本尊をめぐる」『日本宗教文化史研究』三三三号、二〇一三年五月

第二節

- 一、 水野敬三郎「毘沙門天像」『国華』八一五号、一九六〇
- 二、 有賀祥隆「毘沙門天像」『日本の仏画』第二期・第八卷、学習研究社、一九七七
- 三、 村井康彦「列影図巻とその時代」、平林盛得「天子撰関御影と公家列影図―所収人名を中心として―」『日本絵巻物全集』二六卷、角川書店、一九七八
- 四、 須藤弘敏「上杉神社蔵金泥両界曼荼羅について」『美術史学』四号、一九八二
- 五、 泉武夫「安楽寿院蔵阿弥陀聖衆来迎図―その古様な図様と作風―」『学叢』八号、一九八六（同『仏画の造形』吉川弘文館、一九九五所収）
- 六、 加澤昌人「上杉謙信の法体について―高野山無量光院とのかかわりから―」『鷹陵史学』十六号、一九九〇
- 七、 有賀祥隆「釈迦金棺出現図の表現技法について」『釈迦金棺出現図』仏教美術研究上野財団助成研究会報告書第二十三冊、一九九三
- 八、 村重寧『天皇と公家の肖像』『日本の美術』三八七号、至文堂、一九九八

第三節

- 一、 李昆声「昆明地藏寺石幢」『雲南文物古迹』雲南人民出版社、一九八四

- 二、岡田宏二「南宋高宗時代広南西路における馬政——南宋時代広南西路の馬政研究——」(上)『東洋研究』、大東文化大学、九二号、一九八九年一月。同(下)、九三号、一九九〇年一月
- 三、張楠「南詔大理国の石刻芸術」雲南省文物管理委員会編『南詔大理文物』文物出版社、一九九二
- 四、汪寧生「昆明經幢造幢記」『雲南考古』(増訂本)、雲南人民出版社、一九九二
- 五、段玉明「大理国の周辺関係」『雲南社会科学』一九九七年三期
- 六、方国瑜主編『雲南史料叢刊』第二卷、雲南大学出版社、一九九八
- 七、李昆声「昆明地藏寺大理国經幢」『南詔大理国彫刻絵画芸術』雲南人民出版社・雲南美術出版社、一九九九年
- 八、高路加「大理国高氏事迹源流考述」『雲南民族学院学报(哲学社会科学版)』一九九九年第二期(総第九七期)
- 九、王海涛『雲南仏教史』雲南美術出版社、昆明、二〇〇一
- 一〇、薛琳「大理国地藏寺經幢概説」『大理師專学报』二〇〇一年二期(五〇期)
- 一一、楊延福「南詔大理国史上職官“布燮”考」『大理学院学报』二〇〇一年三期
- 一二、高静铮、鐘惠芳、梁钰珠「大理国經幢人事考」『南方文物』二〇〇三年三期
- 一三、梁钰珠、鐘惠芳、高静铮「古經幢造像服飾考略」『南方文物』二〇〇三年四期
- 一四、謝道辛「大理地区仏教密宗梵文碑刻与白族的仏頂尊勝陀羅尼信仰」『雲南民族大学学报(哲学社会科学版)』二一卷第一期、二〇〇四
- 一五、森雅秀「中国・雲南省の密教美術」(上)『春秋』春秋社、四五七号、二〇〇四年三月。同(下)四五八号、二〇〇四年四月
- 一六、「地藏寺古幢」劉景毛他編『新纂雲南通志 五』雲南人民出版社、二〇〇七
- 一七、佐々木大樹「尊勝陀羅尼分類考」『大正大学総合仏教研究所年報』二九号、二〇〇七年三月
- 一八、佐々木大樹『仏頂尊勝陀羅尼經』の研究『智山学报』五六輯(通卷七〇号)、二〇〇七年三月
- 一九、佐々木大樹「仏頂尊勝陀羅尼經幢の研究」四二頁『智山学报』五七輯(通卷七一号)、二〇〇八年三月

- 二〇、川崎一洋「大理国時代の密教文献『諸仏菩薩金剛等啓請次第』に収録される「般若心経法」について」『印度学仏教学研究』第五七卷一号、二〇〇八年一二月
- 二一、川崎一洋「雲南の密教と『幻化網タントラ』」『印度学仏教学研究』第五八卷第一号、二〇〇九年一二月
- 二二、田中公明『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社、二〇一〇

論文の内容の要旨

毘沙門天は、古代インドでは護法神である四天王の一として、のちに中国やわが国においては独尊としても信仰された尊格として知られる。四天王のうちで最も高位の存在として、各時代・地域において天部系尊格のなかでも特殊な信仰と造像が行われた。関係経典は不空訳『毘沙門天王経』など複数が知られており、実際の造像例も多数に及ぶ。

主な先行研究としては、一九二九年に源豊宗氏が「兜跋」毘沙門天の図像は西域に由来し、ホータンを経由して成立したという伝播ルートを提示した。一九三〇年に松本榮一氏が敦煌の作例を中心に経軌や作例を整理し、服飾・鎧・剣などの要素から、それを裏付けている。また、一九九八年には岡田健氏と松浦正昭氏が東寺毘沙門天像を中心とする論考を発表した。岡田氏は、東寺像は空海が請来し羅城門に安置したものであるという従来の通説を否定し、いつぼうで松浦氏は東寺像が最澄によって請来され、羅城門に安置されたと主張した。

源氏や松本氏らが提唱し、後も支持されてきた伝播モデルは近年中国のチベット美術研究者によって修正が主張され、東寺像をめぐる議論も決着を見ていない。また従来は関係経典の多くが偽経と考えられたことから、毘沙門天信仰そのものが単なる民間信仰に過ぎないとの位置づけが一般的であった。しかし、最近では皇帝などの支配者側にとっても毘沙門天信仰が重要であった可能性が新たに注目されている。たとえば中国で唐時代には毘沙門天信仰が流行したきっかけは玄宗（在位七一二―七五六）や憲宗（在位八〇五―八二〇）にあったとする説があり、わが国では毘沙門天信仰が受容された契機は聖武天皇（在位七二四―七四九）や称徳天皇（在位七四九―七五八、七六四―七七〇）にあったと考えられる。したがって毘沙門天信仰は王権の側から広まったという見方も成り立つため、毘沙門天像の制作背景と機能を改めて見直す必要が生じている。なおここでいう王権とは、大陸においては統一王朝の皇帝および周辺諸国の王など、七―十二世紀の東アジアの各時代・地域において掌握された政治的権力や、わが国では奈良・平安朝における天皇および院・摂関家、比叡山や東寺に代表される顕密仏教勢力など寺社勢力のような王権を補完する存在を含む。本論ではこうした王権と毘沙門天信仰との関係性が課題となっている。

本論は毘沙門天像の伝播ルートというかたちの問題、及び王権・舍利信仰との関わりにみられる機能の問題に着目し、七世紀から十二世紀における毘沙門天像について考察する。西域・中国・韓国・日本の毘沙門天像の図像学的・様式的・思想的な研究を中核としつつ、それらの問題を補強するために、請来品にまつわるかたちの伝播と再生産、受容と変容についての問題もあわせて言及する。インドから西域を経て中原から伝えられた仏

教思想・信仰と、それを表象する仏教文物の図像・様式というかたちが、いつ、どのように受け入れられ、各地域で変容したのか、毘沙門天という一つの視点を通して具体的に位置づける。中央から周辺へ仏教文化が拡がるときの発信・受容・変容・発展のメカニズムに注目しながら議論を進めたい。これはインドから西域を経由し、中国・中原を起点として放射状に一つの事象が伝わる空間的な広がり、七世紀から十二世紀にかけての時間的な広がり、という三次元的な構図におけるそれぞれの作品の座標を求める作業ともいえる。

今後の研究の問題点は以下の五点にまとめられる。第一に、東寺像系の位置づけについて。東寺像はいつ、誰が請来したのか、そして羅城門に安置されていたのか否か、という岡田・松浦氏らの議論は解決していない。また東寺像の模刻として知られる京都・清凉寺像、奈良国立博物館像、鞍馬寺像の制作年代や背景についても議論の余地は大きい。第二に、国内作品の位置づけについて。天台系と考えられる成島毘沙門堂像・善水寺像や、観世音寺像、石山寺像などに関して専論が従来提出されてはいるが、それぞれが独立した議論となっており、見解の一致には至っていない。第三に、「兜跋」毘沙門天図像の源流について。それがホータン周辺にある、との見方が優勢であるが、吐蕃（チベット）にあると主張する研究者も近年増えており、さらに議論が必要である。第四に、中国・韓国・中央アジアの各作品についての位置づけと、わが国の作品との関係性について。上述の問題を解く手がかりは大陸作品の把握と、国内作品との比較にあると考える。第五に、十二世紀以前の毘沙門天信仰における機能について。従来は武神や境界神としての機能が強調されてきたが、舍利信仰や王権との関わりもその根本的な性格の一つといえる。

以上の問題点を踏まえ、本論はわが国の毘沙門天像に関する第一部と、大陸の毘沙門天像を扱う第二部とで構成されている。第一部で清凉寺像をはじめとする奈良時代から平安時代後期の毘沙門天像の受容史を論じる。第二部では日本に伝わる以前の源流を辿る形で、三・四世紀の毘沙門天図像の誕生から十二世紀までの展開、すなわち中央アジアから韓国までの伝播ルートを探る。このように時代・地域が交錯する構成とした理由は、はじめに論じる清凉寺像に、中国の唐・宋時代からわが国の奈良・平安時代の毘沙門天像に関する上述の一・三・四・五等の問題が凝縮されているからである。

清凉寺像が制作された十一世紀前半は、九・十世紀までに摂取した外来文化と、それが「日本化」及び「地方化」した文化、そして同時代に受容した外来文化とが同時に存在し、新たなかたちと意味が再生産された時代であった。清凉寺像の最大の特徴は、それが唐から請来された東寺像の正確な模刻であり、その上で北宋の美術を部分的に取り入れた点にある。清凉寺像の造立を企画した盛算は、中国で密教を学び、わが国における空海以来の真言密教の伝統をさらに強固なものとすることを目指した。その結果、唐代密教の不空と明確に結び付けられ、護国的性格が濃い西域風の東

寺毘沙門天像を模刻して清凉寺へ安置し、同時に、本尊である「三国伝来」の釈迦如来瑞像と、その中核をなす舎利の守護神としたと考えられる。上述した五つの問題点に対し、本論ではどのような結論が得られたのかをまとめると以下のようになる。第一に東寺像について、その甲制は九世紀後半以降にしか類例が見出せないことから、制作年代を下げる見方があったが、九世紀前半の敦煌で類例が確認できたため、中原ではそれ以前すでに同甲制の図像が流布していたと考えられた。東寺像を羅城門に安置したか否かという点について、八世紀半ばには毘沙門天像を楼上に祀る形態は認知されており、東寺像を羅城門に安置するという構想は入唐八家のいずれもが得ることができたといえるため、羅城門安置説を追認した。また請来品・經典の分析から、東寺像の請来者としては空海がもっともふさわしいと改めて位置づけたことによって、岡田・松浦説を修正する結果となった。

次に、天台系を中心とする国内作品については、比叡山根本中堂像と、その模刻作品と考えられる善水寺像を中心に論じた結果、根本中堂に安置された二体の毘沙門天像のうち一体は「身細」の最澄御願像、一体は「身太」の伴国道御願像で、いずれも「六尺」「屠半様」であること、善水寺像がそれらを強く意識した模刻作品であること、そしてそれが天台系毘沙門天像において主要な図像系譜の一つであることを明らかにした。

また、「兜跋」毘沙門天図像の源流については、ホータン・ダマゴウ遺跡出土画像（六～七世紀）の分析を通じて、その宝冠にあらわされた鳥の存在により、中原に伝わる前段階の「兜跋」毘沙門天図像の源流はホータン地方にあった、とする伝播モデルを立証した。

大陸作品の位置づけとわが国の作品との関係性については、法門寺像・長干寺像・感恩寺像や関連史料をとりあげ、七世紀以降の舎利信仰と毘沙門天信仰の具体的な結びつきを明らかにし、わが国の作品も同様の信仰的背景をもつことを明らかにした。

十二世紀以前の毘沙門天信仰と舎利信仰に関わる王権の問題にも注目し、中国・日本及び朝鮮半島の史料・作例をそれぞれ網羅的に分析した。毘沙門天が四天王のうち最も高位の存在として信仰された背景には、毘沙門天がその手に捧げる宝塔内に舎利を護持し、王や皇帝と同一視される性格があることが大きな特徴といえる。つまり舎利・王権という切り口によって東アジアにおける毘沙門天の機能の共通性が証明できるのである。以上の五つの問題点をそれぞれ解決したことで、毘沙門天像に関する議論を多角的に補強することができた。

本論の主題を改めてまとめると、毘沙門天像の伝播ルートというかたちの伝わり方の問題、毘沙門天像と王権・舎利信仰という機能の問題の二点に集約される。前者については、ガンダーラで発生した信仰と図像が、中央アジアとくにホータン地域を経由して中国・中原に伝わり、そこから放射状に各地へ拡散した構造を明らかにした。近年発見された資料や、従来注目されてこなかった作品を新たに考察の対象とすることで、否定される

こともあつた古典学説を再評価した形となった。後者について、東寺像・比叡山根本中堂像や、それらの模刻である清涼寺像、善水寺像、そして隅寺像、法門寺像、長干寺像、感恩寺像など具体的な作品の制作背景から、毘沙門天と王権との関連性を実証することができた。また、王権と結びつく理由として、毘沙門天が舍利を持つ役割を担っていることを強調し、舍利信仰との関係を指摘したことも本論の新たな視点の一つといえる。